第２回　村上市総合教育会議　議事録（要約）

１．日　時：平成２８年９月２７日（火）　午後１時３０分～午後３時００分

２．場　所：村上市役所　本庁５階　第５会議室

３．出席者

【構成員】高橋市長、遠藤教育長
大滝教育委員、佐藤教育委員、本図教育委員、勝間教育委員

【事務局】佐藤総務課長、遠山学校教育課長、田嶋生涯学習課長、山田総務課参事
小川指導主事

【傍聴者】４名

【報道機関】０社

４．欠席者

なし

５．内　容

【市長あいさつ】

高橋市長：皆さんこんにちは。日頃は当市の教育行政にいろんな側面からお力添えをいただき誠にありがとうございます。大切な子供達でありますので、彼等・彼女たちが、これからしっかりと地域に誇りを持って年を重ねていくことができるようにお力添えを頂きたいわけでありますけれど、ご承知のとおり、先日、子供が大変痛ましい事故に遭いました。やはり、道路環境も含めて、そういうことに対する環境整備はもちろんでありますけれど、そこを利用する我々も含めて、特に子供達、彼等の交通安全に対する意識、そこのところにも機会をとらえて、皆様方からもご指導いただければ、なおありがたいなというふうに思っております。

市といたしましても、しっかりと、その後の対応を進めているわけでありますけれども、このリスクを全て解消するということには至らないのが現実でありますので、やはり、自らの命を自らが守っていくという意識付けも必要かなというふうに、今回強く感じたところでありますので、子供達の安全のみならず、市民の安全という意味合いの中からも、しっかりと対応して参りたいと思いますので、皆様方からもお力添えを賜りますようお願いを申し上げまして、開会のあいさつとさせていただきます。

よろしくお願いいたします。

【委員長あいさつ】

遠藤教育長：皆様こんにちは。市長よりあいさつが長くなりますが、お許しください。

今日は、子供の学力向上、それから教育大綱についての話題となっておりますので、昨今の国の情勢なんかも踏まえながら、それに関して２点述べさせていただきたいと思います。

１点目は、学校教育予算の有効活用を図っていかなければならないということです。どの自治体でも、財政状況が厳しい中、本市においても学校教育、社会教育に多大な予算を配慮いただいております。やはり、今、学力向上、それから児童生徒の学校生活の充実を保証するということで、望ましい教育環境整備方針に基づいて、学校統合についても検討しているところですが、やはり、その他の諸々の条件も整備していかなければならないと思っています。

例えば次のような件、やはり高額なお金がかかる環境整備ですので、難しいなと思っている次第です。

１つ目は、2020 年度からデジタル教科書を導入できる、という見通しになっております。これは、多分、自治体間で大きな差が出てくるのではないかと思います。現在でもデジタル教科書というのはあるんですけれども、村上市の現状として、中学校で教師が指導者用としてデジタル教科書を教材備品で購入している中学校もあります。ただ、そのデジタル教科書というのは副教材で、ひとつ、７万円とか８万円するんです。特に、数学・英語・理科で有効で、視覚にも訴えられる、聴覚にも訴えられるということで、子供たちの学びの興味付け、関心、意欲も図られると聞いております。

それから、教師にとっては、様々な教材準備の時間も少しは省けるということにも活用の有効性があると思います。ただ、教室に指導用のパソコン、電子黒板、又は大型テレビでもいいんですが、それが無ければ活用できません。現在、各学校に電子黒板２台はあるんですが、やはり、各教室に常設されていないと、なかなか教員は使おうとしません。そういう意味で、デジタル教科書を含めたその他の環境整備も必要なのだなと思っているところです。そして、今後、児童がデジタル教科書を使用するとなると、各教科ごとに子供１人当たり数万円必要となるんです。デジタル教科書は、文科省が無償化の対象にしない方向ですので、購入するとなると、１人１教科につき数万かかると聞いております。莫大な経費がかかります。しかも、４年ごとに教科書は部分改訂されますので、場合によっては、その都度買い替えなければダメということになります。さらに、その使用の前提となる教室環境整備も必要となります。情報端末のタブレット、電子黒板、パソコン、それから無線 LAN などのネットワーク環境整備、この諸々を揃えたうえでデジタル教科書が無いとダメなんですね。今、全ての小中学校は防災の拠点でありますので、防災と関連して Wi-Fi の環境整備に向けた動きが進むのではないかと思っておりますが、そういうデジタル化に対応するには、本当に強い市の方針、教育委員会の方針が必要なんだと思います。２つ目ですが、冷房設置でも、自治体間で差があります。新聞発表にもなっていましたけれども、普通教室への設置率は、新潟県が平均 9.3%です。村上市は２%です。もはや、この夏の猛暑の教室で学習するには贅沢品とは言えないと思います。ただ、本市においては、学校からどうしてもつけてくれという声は上がっておりませんので、扇風機を沢山用意してくれよという要望はあって、なんとか応えているところです。３つ目は、吹奏楽部のある中学校からは、楽器が古くなっていると、やはり、１つが数十万円しますので、高価でなかなか導入できないという悩みがございます。部活動ですので、最優先とはなりません。

そういう３つのお話をしましたけれども、そういう諸々の環境整備をしてやらねば、なかなか、学校生活を充実させることはできないということも事実ですので、今後、学校と良く

相談しながら検討していかなければならないと思っているところです。

それから、２点目は、多忙化解消。教員を楽させるわけではありませんけれども、2020 年度から小学校は、新学習要領の全面実施に向けた動きが始まります。１年遅れて中学校が始まります。先行実施ということで、遅くても来年あたりから始まってくるのではないかと思うんですが、５・６年生の英語が教科化されます。英語が教科となります。年間に２コマ取らなければならないんですが、時間割上窮屈で、１コマは取れるんですけれど、もう１コマが取れません。すると、15 分×3 コマ、45 分を１日 15 分、それを 3 コマ取ってやるような時間割を組む学校が、出てくるんじゃないかと思います。

それから、小学校３・４年生も英語活動を実施する時間割に、新たに１コマ位置付けないとダメです。窮屈な時間割になります。

それから、中学校は、授業は全てオールイングリッシュ。英語でやらなければなりません。ということで、教師の力量アップが必要不可欠になります。やはり、多忙感は増すのではないかと思っております。さらに、2018 年度に小学校。１年遅れて中学校が 2019 年度に道徳が教科に格上げになります。すると、評価しなければなりません。日々の授業で、子供達の学びを蓄積していかないとダメなんですね。そういうこと、多分、今まで教員してきませんので、苦労も当然のように伴うと思います。

それから、小学校でプログラミング教育が実施される。私も良くわからないんですが、中学校では技術科などで具体的にパソコンを使っているようです。自分の意図を実現させるための道筋を論理的に考える学習なんだそうです。これもパソコンを使いながらやっていく、そういうのもを教員が学ばなければなりません。

それから、やはり部活動に求める保護者、子供たちの声が強いです。学校は、大変真面目ですので、従来の教育活動を削るのはなかなか苦手で、どうしてもビルド＆ビルドがちになってしまいます。学校が多くのことを背負いすぎないように、教員に余裕が少しでも生まれるように、教育委員会も学校を支えていきたいと思います。

ということで、不登校、いじめ、それから特別な支援を必要とする子供達の支援に対応できるよう、児童に寄り添えるようにしていければと思っております。市からも介助員、それから非常勤講師、外国語指導助手など、たくさんの配置をしてもらっていますので、それらの者を有効活用しながら取り組んで行きたいと思っております。今日は学力、それから今後の教育の方向についてご検討よろしくお願いいたします。

【報　告】

①「全国学力・学習状況調査の結果について」

学校教育課小川指導主事が、資料１に添って報告。　　～27 分

勝間委員：細かく分析されてあって、関心したんですが、ざっと説明を受けた感想としては、やっぱりため息が出るというのは私の正直なところでございます。細かい分析はこれから課題として残るんでしょうが、1 ページの考察の③のところに、「学校間において大きな差が見られる」とあります。大規模校、小規模校さまざまあるでしょうが、どの学校がどうというのはさておき、こういう雰囲気だと子供はやる気を出して学力に取り組む力があって、それ

が家庭学習の時間とも相関的な関係を持っているとか、その逆も、ということを細かく分析いただいて、具体的に、この学校は家庭学習を重点的にやってやろうかとか、この学校は落ち着きが無い、生徒指導的に若干ざわついているとか、学校によって背景を考慮した対策なり、先生方への指導研修をお願いしたいなと思います。

高橋市長：私も聞きたかったんだけど、そういう分析とか、具体的にしていますか。極端な話、学校の規模で違いが出てるとか。そういう傾向は見られますか。

小川指導主事：学校規模による差は、端的に言うと、そういう傾向は見られないわけではないのですが、例えば小学校であると、上位 5 校が小規模校です。

高橋市長：小規模校が成績が良いということですか。

小川指導主事：今回の結果では、そういうふうなところが見られます。大規模校は人数の母数が多いので、小規模校ほど一気に上げるというのは難しいところもあります。それは中学校も同様であるように感じでいますが、子供たちの集団といいますか、子供たちの人数だけでは無くて、学校の抱える課題もありますので、一概には言えないと思いますが、数値上ではそのような形が今回は見られます。

高橋市長：ということは、今の話を聞けば、大小にはかかわらずということ。大小にかかわらずそういう傾向が出てくるんで、そういう切り口は、なかなか対応しきれないというふうに聞こえたんだけど。

小川指導主事：そんなことでは無いんですが。

高橋市長：それであれば、小さい学校をいっぱい作ればいいわけでしょ。

小川指導主事：そういうことではないと思うんですが。例えば中学校であれば、最も成果が上がっているのが、学校規模とすれば小さいんですけれども、1 学級が 30 人程度で非常に大きな人数を抱える学校であったりしますので、一概には、そう言えないかと。

高橋市長：そうすれば、クラスの人数に起因する影響の方が多いということですか。子供たちの教育環境ってさまざまで、1 ケタのクラスもあれば 20 人、30 人のクラスもあって、その中に元気な子もいればおとなしい子もいて、そういう状況の中でやっているクラス運営がスムーズに行っている場合とそうでない場合と、というのがあるんだろうと思うので、一概にはそういう比較はできなということなのかな。

小川指導主事：そうは思っています。子供たちの構成にもよると思います。

本図委員：これに関する質問なんですけど、その学校間による大きな差というのは、毎年同じ学校っていうことでしょうか。それだと、地域性みたいなことに関係があると思うんですけど。

小川指導主事：小学校においては、あまりそういう傾向は強くは見られないかと思います。ただ、固定化しつつあるところはあるんではないかなと。

高橋市長：そういうのであれば、ターゲットは決まっているのでは。どこに何を対応すればいいかというのは決まっているので、そういうことで良いのではないか。

小川指導主事：とりあえず、中学校であれば大規模校が課題を抱えている学校です。小学校の場合は、ごく小規模校が沢山ありますし、その中で子供たちの、例えば母数が小さいので１人優秀な子がいれば、ポーンと上がります。そうでないちょっと苦手な子供がいれば、一気に下がるということもありますので、子供の質が端的に表れてくるという傾向があります。

高橋市長：この統計の表を見てわかるとおり、村上市という大くくりでやると全部の平均なんで訳が分からなくなる。現場の先生方は一番良くわかっているので、それに対応した適切な部分をピンポイントで充てていってもらっていると思うんだけど、そういう意味合いからいうとなかなか。

こういうふうに、全部まとめて、28 校分を見せてもらっても、なかなか容易でないというのはありますけど。

それで、全国平均、ある意味指標にはなって、そこをターゲットにしていくというのはありなんだけど、この地域の人材をある程度のポテンシャルまで上げてやって対応をするときというのは、多分、全国平均というのは関係ないと思う。それ以上にどんどん上の状態、それは、各クラスでも上の子がいて下の子がいて、平均になっているのだからどうしようもないんだけど。この上のボリュームを増やしてやる仕組みを作れば、それだけパイがでっかくなっていくのだから、そうすると、私の実体験側の経験層から言うと、中等あたりだと、チーム戦でやってたので引っ張られて上にあがる。そういうふうな仕組みが導入できると、全国平均は指標にはなるかもしれないが、そんなものにこだわらずにもっと高みを目指していく方法がいいのかな。そして、教育長が話をしたデジタル化とかそういうふうな取り組みなんかも。

前にお話したこともありますけれども、例えば私塾の先生方を導入していくとか、例えばコンピュータ教育であれば SE とか、そういう部分を導入していくとか、介助員という形のものがそういうものであってもいいんじゃないですか。そうすれば、それを 2020 年からスタートさせる前に、早めにランディングさせておけば、2020 年にそれなりにいくつかのパイができていくので、そんな方策なんかも考えて行った方がいいのではないかと思いますけど。全部学校の先生にそれをやらせようと思うと、ダメだと思う。

遠藤教育長：私も、全国平均と比べるだけでなく、各学校はもちろん分析しているし、市にも

そういうデータは来ているんですけれども、例えば 80 点から 100 点を取っている層に何人、60 点から 70 点何人、要はどういう分布をしているのか、できる子もいるけれど、著しく悪い子もいる、それとも全体的に悪い方に寄っていて村上市は悪いとなっているのか、自分の学校は悪いとなっているのか、それによって、取り組みが違ってくるはずなんですね。だから、本当に正確に、いろんな視点から分析しないと効果的な対策は得られないと思います。まして、特定の学校がなかなか改善しない。確かに事実なんです。そこが頑張れば、絶対村上市は上がるんです。上がるけれどもやりきってない。

２年間数学プロジェクトをやってきたんですが、やってない学校、取組が甘い学校は悪いんです。やってる学校は成果を上げている。だから、この改善策のところに、「定期テストを改善し、共通問題を設定して取り組む」という一言を入れています。問題を易しくして定期テストをやっている、授業がなまぬるいから、易しい問題でも点が取れるようにしている。それじゃ絶対上がらないんです。いい学校の、レベルの高い学校の問題を取り入れるとか、その共通問題を取り入れることによって、自校は、そこの問題ができていないということは、絶対に落ち度が、日々の授業が悪いということですので、そういう改善策も短い言葉ではありますが、取り組むことで授業も改善していけるのではないかと思っております。

佐藤委員：先ほど話したように、小学校においては非常に全国平均よりも上だし、全体的には非常によかった。小学校では良い状況ですけれど、中学校になって全国平均を下がってくるということは、その下がり具合ですね。その学校の、どんなふうな下がり傾向というか、比較的いいのは中学校でもそのままいいのか、それともグッと下がっていくのか、その辺のところはどんなふうになっているのか。

小川指導主事：個別の良かったかどうか、こちらで調べることはできないので、分らないところが大きいんですけれども、例えば、今年度中学校３年生の結果で、３年前に小学校６年生でした。その子たちは全国を、算数の B 以外は全部超えている子供達だったんです。全国を４教科合計で約５ポイント程度上回っている。今回の子供達は全国を 10 ポイント以上下回る結果となっています。新潟県の３年前、平成 25 年度の小学生の結果、新潟県の子供たちは全国を 7.8 ポイント上回っていたんです。それが、今回は県は 1.3 ポイント、およそ６ポイント程度下がっているというふうな結果となっています。下がり具合は、村上市は非常に大きい。20 ポイントまではいかないんですけれど、それに近い下がりかな。ちょっと大きいです。

遠藤教育長：NRT を市費を投じてやっているわけですけれども、中学校に行くと１年生よりも２年生、２年生よりも３年生、学年が進むに従って下がっていくんですね。それが、私は許せないんですけれども。

やはり、小学校がもっと余裕を持って、もっと良くして中学校に渡さないと。意欲的な者、約 50 名が中等に進学しますので、それを除いた子供たちに踏ん張ってもらわないと、中学校はやっていけないんですよ。だから、本当に小学校で力を付けて引き渡してやれるように、小中共に連携しないとダメなんだと思います。

高橋市長：悩ましいですよね、その辺。今回、英検を受験する子供たちには支援するということで、受験料を公費負担していくというスキーム。これは、将来的には漢字検定など、全部やってもいいなと思っているんですけれども、そうやってきっかけ作りみたいなものを作ってやって、胸に勲章を付けられるようなことをやって、モチベーションを上げてもらうようなのも一つの手だと思うし、結局本人の意識ですよね。

この前、村上病院で林ドクターがキャリアスタートアップの子供たち、中学生向けのお医者さんを目指そう仕組みをやったんだけれど、去年は十何人だったのが今年は五十何人も来てて、その中で医者になりたいなんていうふうに思うわけだ。彼等、彼女たちは。

そうした時に、そこを目指せる学力まで到達させてあげないと、中学校の時点でアウトになる。やっぱり、大学受験の時に、アウトにならないような仕組みを作るためには、小学校から中学校に行ったときのアプローチの仕方の部分が一番の問題だっていうことが明らかなわけだから、そこのところ、絶対にモチベーション下げない仕組みというのを、いろんな手を尽くしてやってみて、一番効果が出るものを残していく仕組みを、具体的に取り組んでいかないと、容易でないんでないかなと思います。

全国的にも、とうとうドクターの数が下から２番目になってしまいましたので、そういう意味合いからいうと、素質を持った子が出てこないことには、どうしょうもないですよね。それが今一番根っこのところにあるわけなので、ぜひ、ここのところは、少し力を入れて。先生方が一生懸命なのは、現場を見て良くわかります。それがきちんと効果を発揮できるような仕組みを、逆に言うと周りの環境整備みたいなものを含めてやってやらないといけないのではないか。

佐藤委員：それもそうなんですけれど、子供たちの会話を聞いていると、会話の中でも３年生、４年生の子供たちの話を聞くと、金曜日の日は、明日、明後日休みなんで、宿題は今日のうちに終わらせないとダメなんだ、今日中にしないと親に怒られるというような言葉なんですね。だから、３、４年生は、そうやって親に怒られるというような意識で、生活習慣の中の習慣としてあるようです。

やっぱり小学校では、学ぶ楽しさとか喜びとか、というようなものに変わっていくような仕方というか、考え方の環境作りが大切。最初はちゃんと親に言われてしなければならないんだという、１、２年生、３、４年生くらいまでは、しなきゃいけないというような。親に怒られるんだ、というような子供たちの声が聞こえてきます。それが、小学校のうちに楽しいとわかる環境作りが大事なのだと思う。

中学校１、２年になれば、親が勉強したかなんて言うと、反発ばかりで、親と喧嘩になって、かえってしたくない気持ちになっていく。生活習慣が大事なのかなと、様子を聞いていながら感じますね。

遠藤教育長：後で時間あったらご覧いただきたいんですけれども、実際の問題です。私たちが当然解いたことの無いような問題なんですが、村上の子なら、こんな問題出来てほしいんですけれど。

まず、こういうふうに文章を、何が書いてあるか理解できないとダメなんです。最初が文

章のページです。そして、次のページを開くと問題が具体的に聞かれるんですね。読み取るというか、根性出して読まないとダメなんです、要領良く。私なら、先に問題を見てから文章を読みますけどね。そういうテクニックもいるし、で、記述なんで書かなければ点になりません。あきらめないで、全てこういう長文、だから日頃の読書習慣とか、そういうのも大切ですし、この問題なんか、３ページが解説なんですね。問題が始まる、とにかくあきらめないこと。これ、中３数学Ｂなんですけど、決して高校入試のように難しい問題なんて一つもないんです。こんな、ガソリン入れるような絵まであって、読んでいけばいいんです。基礎の活用なんです。応用ではなく活用だと言われてますんで、本当に、そんなに難しくは無いんですが、限られた時間で理解する。日頃からの、そういう努力も必要なんだなと思います。

高橋市長：この結果を踏まえて、いろんなご意見をいただいてると、これだけで今日の会議が終わってしまうんで、先に進めさせていただきたいと思います。また、方向性として、いくつか課題にある部分はあるんで、そこを具体的に対応していくということ。また、反映をさせていきたいと思いますんで、よろしくお願いします。

遠藤教育長：この資料をもって、市のホームページに掲載して、結果の公表という形にさせていただきたいと思うのですが、了解願いますでしょうか。

高橋市長：皆さん、良いですか。今まで公表してたっけ。

遠藤教育長：いいえ。今回が初めてです。

高橋市長：差し支えないと思いますが。良いですか。一番最後の文面というのは、「重点中学校区を設定し」という改善策になっていて、平成 29 年から設定すると、29 年になるとここが一番悪かったのかなと明らかになるのでは。

小川指導主事：これについては、市も重点的な課題を抱える学校区というところに入っていきたいと思います。来年度、学力向上計画訪問という県の施策があるんですけれども、それの仕組みが変わるということで、それとタイアップして。

高橋市長：どうでしょう。よろしいですか。じゃあ、29 日に県の方で公表した後に公表するということでお願いします。

遠藤教育長：10 月に入ってから公表させてもらいたいと思います。

【協　議】

①「村上市教育大綱（案）について」

遠藤教育長が、資料２に添って説明。　　～54 分

高橋市長：前回、大きな骨子についてお示しした内容について、今、骨組みが表れてきたということだと思いますけれども、皆様方から、今の教育長からの説明を受けて、ご発言があったらお願いします。

佐藤委員：今回の臨時教育委員会の時に話をさせてもいただきましたが、合併して28年度までは基本計画は外枠、体制、形を整えてきた。

これからの基本計画は、その中身を充実させていくということが大切と思っています。その中の施策として、９つの基本施策が打ち出されたわけですけれども、その中でも３番の「豊かな健やかな体の育成」の捉え方。今までは、ハードの部分とかだったが、これからは、命と心に関する学びの周知化、その辺の、その自身というか一人ひとりの人格を尊重しながら、自己肯定感と自尊感情というようなライフスキル的なものを向上させていくという考え方を、ぜひ取り上げていただきたいと考えています。

これから市民の生活の利便性が高まるメリットのある反面、知らない間に犯罪に巻き込まれるデメリットも考えられることから、社会適用能力を身に付けることが必要と思います。個人の判断とか、良い悪いの判断は、やはりレベルの高いところで判断して行動できる人になっていただきたいと思います。その施策として、本人の、一人ひとりの命を大事にしていくことをベースに考えていただきたいと思います。

そんなことから、学校教育課だけでなく、やはり福祉や保健医療課とか、そういうような、生涯学習課ももちろんですけれども、横のつながりというようなものが、これからは不可欠になってくると思います。ぜひ、横との連携というものも考えていっていただければいいかなと思います。相談員の強化、スクールカウンセラーもそうですし、学校を取り巻く環境整備というものが大事と思いますのでお願いしたい。

これらの施策を進めていくにあたって、諸処の条件の中で考えて、その環境を整えていくということが一番大事だと思う。やはり、学校の先生であればプロとしての教育、教えるという、そういうことを十分に発揮できるような環境づくりを、まず第一に考えていかなきゃならないんじゃないかな。さっき言ったように、本当にこれから多忙化していくわけですので、それぞれの役割認識みたいなところで分けていって、先生方ができるだけスリムで本来の仕事、子供たちに向いていけるような、そういうような仕事ができる環境づくりをしていく。具体的には事務は事務サイドでできるでしょうし、外部から必要な人は外部からというふうに。環境整備というのが大事なんじゃないかなと思ってます。

それともう一つは、村上市としての資源を大切にしていくというとこで、市長さんが活気に満ちた輝くにぎわいのまちづくりというふうに進めて、村上牛のことだとか、林業体験だとか、漁業のことについて、伝統産業の拡大と後継者育成というような、そういう部分のところにおいても、力を入れていくということですけれども、子供達と大人とともに一緒になっていけるような体制を作っていかなければならない。学校の中での時間というのが短縮されて、本当に少ない授業の中でやっていかなければならないこれからですので、土日や放課後を活用し、ボランティア等々を含めながら、地域の良さを子供たちに伝える機会を作っていただけたらと、２つのことについて施策に伴ってプラスしてお願いしたいと思います。

高橋市長：本当に、大切な視点ばっかりですね。やっぱり、将来にわたって継続させていくために重要な部分なんで、相対的にこの大綱そのものの骨子、OK だと思ってて、今、人を繋いでいく仕組みとしては、佐藤さんのおっしゃる通り、小学校からスタートさせるのでは遅いんだと思うんですよ。やっぱり、保育園、幼稚園、以前から幼保小中連携といわれているとおりにしてるんだけれど、なかなか具体として、保育園の年長さんは整然とした形で卒園していきますけれど、小学校１年生になるとまた赤ちゃんになってしまうみたいな世界。せっかくそういう３年４年を過ごしてきてるのだから、そのまま育ててあげるためには、保育園、幼稚園と小学校が普通に連携すればよいだけの話ですよね。

例えば、可能かどうかはわからないけれど小学校の先生とか保育園の先生とかが、微妙に１年生のところは重なり合うとか。具体的にそういうふうなものをしてしまってもいいんだろうなと思っている。それは小学校と中学校は一緒、高校も一緒だと思っているんで、まさにそこのところは縦に一本繋いでいく仕組みというのが大切で、そこは２番目の活力ある部分にも実は繋がってて、今は当面村上市の経済活動をしっかりと、このボリュームで動くよという形をしっかり維持するためには、今、担い手が無くなって来て、無くなる産業もありそうなので、それはまず何とかしなければならないというのも含めて、その後継者というのが今の若い世代だから、この村上で育つことに誇りを持つという教育の一本通った軸みたいなのがあるといいなと思って。それは、教育分野でも一本通すし、経済活動、今後の将来に向けての方向性、年を重ねていく時にそういう思いに至るような施策というのをやりたいなと思っていますんで、ぜひ、その辺は比較的メニュー出しとしてはいくつかやってるわけなんで、それをしっかりと動かしていくという仕組み、そこをまたブラッシュアップしていくというような形で進めさせていただきたいと思います。そこで人材が育ってくれば、それに勝るものはありませんので、そういう取り組みをしたいなと、私自身も思ってます。

勝間委員：今回の大綱で、郷育という言葉が表に出てきて、私、この柔らかい響きの郷育という言葉が、大変、感情的に好きです。それで、私が言いたいのは、こういう大綱だと、とかく大人の視線からやるんだけど、大事な子供達がもっと意識できるような郷育というもの、ここで生きるんだという喜びというような、意識付けを具体的にに子供達の見える姿で考えて、それを全市共通というのは、例えば村上市に「鮭のぼり」ってありますよね。こいのぼりの代わりに、あれを、各学校に、皆で国旗掲揚塔かなんかに「鮭のぼり」を揚げて、そこでこいのぼりの唄を歌ったり、市民憲章を、大綱でもいいですけど、皆で唱和するような。そうすると合併１０年を迎えるのに、村上市、私は神林ですけれど、どうしても郷育というと、狭い、旧小学校区とか、そうなるけど、これからの郷育は村上市全体を踏まえたうえでの郷育なんです。なんていうことを、具体的な教育現場、小中、保育園でもいいと思いますが。

そして、四季折々、村上市の伝統的な歴史風土、雛祭りとか屏風とか各旧町村区に一杯眠ってるんですね。それを各学校が四季の、そういうセンター的な位置付けで、参加すればどうかな。雛祭りを学校でやっているところがありますけれど、そういうのをある程度意識付けて探して、こいのぼりを、鮭のぼりを仰いだり、お雛さまでおだんごを食うとか、そうい

うほのぼのとしたものが、郷育の中に具体的に子供たちが、郷育村上でやっている郷育とはこういうもんだなあということを体験し、実感する場があると、その子供達が、将来村上市の中核を担う時にも小学校を覚えているかなんて、ふっと思ったりしますので、それをぜひ基本施策の中で、何らかの意味で考えていただければなと思って発言しました。

高橋市長：ありがとうございました。非常に大切な視点だと思います。なかなか２０年に合併してから、村上市としてのその冠の一体感の醸成というのは、なかなか容易でないというのが、常に直面しているような状態もあったりするんで、ぜひそんなところはまっさらな状態の若い世代、子供達に対しての意識の中から、そういう一体感をしっかりとして積み上げていくというのも大切だと思います。

勝間委員：年々、こいのぼりが少なくなって、それが寂しい。

遠藤教育長：私も校長やってた時に、学校便りに４月５月はこいのぼりを揚げろと、公の施設、小中学校は、掲揚塔あるところは全て揚げようということを書いたんですよ。村上小は揚げてたんですけど。

本当に、今まで庄内町でも三之町でもたくさん揚がってたんですが、この頃見ません。だから、家庭に眠っているこいのぼりなんて沢山ありますので、借りてきて揚げればいいんだと思います。この少子化の世の中、活気溢れるように。それから、勝間委員が言われたように、１１月１１日の鮭の日なんかは、本当に鮭のぼりを、私、揚げてました。ところが、村上小とか村上南小には鮭のぼりがあるんですけど、よその学校に無いって言うんですね。小さなことかもしれないけど、村上市の記念日なんですから、そうやって揚げれるような活気あふれるものにしたいなと、私も思っています。

佐藤委員：それに追加で、こいのぼりのことについては、町づくり協議会の人達や公民館主催とか、眠っているこいのぼりを集めて、各集落にこいのぼりを繋げてやっている。うちの集落なんかもそうですけれど、そういうようなのは５月の連休の時に１週間なり、やっている。やり方としては、学校でもいいでしょうし。

村上牛のことについては、子供達が村上牛はおいしいけど、どこで飼っているのか、村上の地域の中にいるんだろうかって言っている、どこに育てられているのかわからないっていうのが大半です。だから、そういう部分においては、もっと身近に感じられるようなやり方をお願いしたい。鮭はだいぶ知られてきました。今、掲げていこうとしている部分においては、やはりまだ知らないというのを感じます。あとは山北の山、林業の部分において、高校生を対象に体験をやっているようですので、ぜひその辺のところの PR や、子供達が遊びながら知っていくというような方法を取っていただければと思います。

高橋市長：そうですね、本当に。林業の部分からいうと、今、高校生で現実問題、就職につながっているのが管内で４人もいるんで、ありがたいなと思うんですけど、これが中学校若しくは小学校からスタートさせると、もっともっとイメージって湧くんだと思うんですね。だ

から、そういうふうな取り組みをしようということは、徐々にアプローチしてます。

村上牛は、実はいないんです、村上の中には。買える場所はありますけれど非常に高い。それで、ブランド牛として提供していくためには、ある程度の供給量が必要なんで、その供給量が一手に買い占められているような状況もあるもんですから、だから地場でなかなか供給できない。この前もふれあいトークで言われたんですけど、食べたことが無いと言われて。我々が食べてその良さがわかって PR していくっていう仕組みが必要なんだろなっていうことで、今回、種牛、元牛を買ってきて育てるのが容易でない状況ですから、元牛を買い易いように、仕組みを入れたということですね。それが、頭数が増えていけば、地元にも供給できるような仕組みになる。あるけれども非常に高いという状況だと思います。いずれにしても、昨年就任させていただいてから、いろんな課題に直面をして、全てのことにキックオフさせている状況なので、そのゴールがどこに到達するかというのを、やっぱりこれは、一朝一夕にならない部分もあるもんですから、今後とも精一杯やらせていただきますので、よろしくお願いします。

遠藤教育長：第３回策定委員会がありまして、そこでもう１回表現を揉むことも考えられますので、もし表現の部分で訂正させてもらったら、それを次回の教育会議に。

山田参事：では、今ほどのご意見なんかも併せて、今後の日程についてお話しさせていただきます。この教育大綱とあわせて教育基本計画も同時に作成している最中とお聞きしております。この教育大綱と教育基本計画、これはどちらが上位ということでは無く、内容も同一方向で作成しているということもありますので、一緒にパブリックコメントの方をさせていただこうと考えております。期間についてですが、１１月７日から３週間、その結果も踏まえて、１２月に総合教育会議を開催して、この教育大綱の最終決定に至りたいと考えておりますので、ご承知おき願いたいと思います。

高橋市長：よろしゅうございますか。それでは、村上市教育大綱の案につきましては、以上のとおりとさせていただきたいと思います。

【意見交換】

①学校教育課から

遠山課長：それでは、学校統合につきまして、現在までの進捗状況等をお話しさせていただきたいと思います。１５校を７校ということで、説明会から始まって、検討会等を行っております。現在、７校の中で両校、又は地域、PTA の方々から、統合への合意形成が図られたということで、統合推進委員会を設置する段階に至っておりますところが２校ということで、今現在進めております。また、両校合同検討会で体制においては合意形成が図られつつあるものの、地域 PTA 会員等への再確認を行うというところや、要望を受けて説明会等を計画しているところが２校ということであります。残り、３校につきましては、両校また３校によります合同検討会の２回目、３回目を予定しながら進めていくということで、地域の方々、PTA の方々のご理解とご協力をいただいてるということで、教育委員の皆様方にもご足労願

ってるということでございます。

高橋市長：学校教育課は統合関係ということで、その１点だったわけでありますが、皆さん方からご発言がありましたらいただきたいと思いますが。

特に無いようですので、非常に悩ましい部分ではありますけど、将来を見据えた形の中でしっかりと、逃げずに向かわなければならないという覚悟、私もしてますんで、皆さん方からいろんな形でご意見をいただければなと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

②生涯学習課から

田嶋課長：現状と課題ということで、３０代から４０代の男性の教育はどうあるべきかというのをですね、ちょっと話をしてみたいと思います。

まず、私共が主催をしている学級講座においては、３０代から４０代の男性は、ほとんど参加者がおりません。それで、今無理やり仕掛けをして、どうしても小さなお子さんを持っているお父さんが出てくるような、親育ち講座というのをやっておりますが、例えば料理を作ってお母さんに食べさせてあげようとか、ホワイトデーとかクリスマスといったときにお父さんが料理したのを、ケーキ作ってお母さんに食べさせよう、親子で作ろうみたいな企画をしてやってはいるんですが、お父さんは出てきてはいますけれども、調理室等の関係等もありまして、大変少ないです。それから、スポーツの現状はどうかといいますと、スポーツ少年団とかその他の少年団等の指導者で、自分が若いころ選手であって指導者になっているという人はおりますが、数は少ない。それから文化芸術活動等においても、昔頑張ってきた人たちがずーっとそのまま年配になって、その後引き継ぐ若い後継者となるような 30 代、40 代の男の人はほとんどいないという現状であります。

では、何をしているんだということで、街中を調べてみますと PTA の役員になっている男の人は何人かおります。それから、一番余計だったのは、地域の消防団です。消防団に行きますと若者がたくさん入っております。ここでは、昔の青年団は無くなっておりますけれど、町内集落との繋がりというのが大事で、大須戸能なんかもそうですが、若手がおります。それから、夏休みなどに町内対抗のスポーツ大会やこれから行なわれる町内対抗の駅伝大会とか、こういうところになると３０代４０代のお父さん方も参加しております。消防団と町内集落に関わった繋がり、これがですね、小さなコミュニティーが一番大きな要素といいますか、戦力になっているんだなと感じました。

それから、インタビューしてきたんですが、仕事が忙しくていろんなところに入っていないという人も沢山いました。それから、商工会議所の青年部とか村上青年会議所、OB を含めてですねインタビューしてきたんですが、やはり、この年代は商工業に力を、自分の会社だとか仕事のことを中心にやっているので、ボランティアもやってはいますけれども、そういった学び活動といいましょうか、学級講座に関わるようなことは、ほとんどできていないという現状があるということであります。それから、若者の交流の場の提供ということで、おしゃべりカフェというのを月に１回やっておりますが、この活動をやって感じていることは、今まで私ら公民館とか社会教育のメンバーが、何か学級講座を開いて何かを学んでほしいとか、何かを伝えたいとか、そういう願いで進んできている。どちらかといえば教えると

か、言葉で言うとティーチングに力を入れていたようなんですが、今の時代はそうではなくて、おしゃべりカフェを見ていて感じることは、自分たちでアイデアを出して必要な時にアドバイスしていただく、どちらかというとコーチングの手法といいましょうか、こういったものが今必要なんだなということが感じてきておりまして、これから３０代４０代の男の人の学び、先ほど、最初に学力の話もでましたが、やはり、小学生とか中学生を持つ年代となるお父さん方の学びは、家族で一緒に学ぶ環境だとか、そういったことも必要なんだなということで、今村上の若者の学びについて現状を私なりに見たり聞いたりしてまいりまして、これからさらに力を入れていかなければいけない。でも、その力の入れ方としては、地域づくりとかまちづくりの手法と同じようにコーチングの手法で共に考えたり、共にアイデアを出したりして行動していくような、そんなことが必要なのかなということで、後継者育成を含めた、バトンタッチということも含めて３０代４０代もう少し焦点を当てて、これからスポーツも文化芸術活動も含めて、社会教育活動全般に、とにかく集まって来てくれる人と一緒に話し合いをするところからスタートしていかなければならないのかなと言うようなところを感じているところでございます。

教育委員のメンバーからは、ぜひこの辺の３０代４０代、特に男性の教育はどうあったらいいのかというところですね、ご意見いただければ幸いです。

高橋市長：皆様からご発言がありましらお願いします。なぜ女性は関係ないのか。

田嶋課長：女の人は比較的、ママ友達で集まってきています。

高橋市長：女性の方はティーチングモードの、そういうのでも大丈夫なんですか。

田嶋課長：そういう訳でもないんです。おしゃべりカフェなどを見ていても、やはり女の人。

高橋市長：その年代というのは、容易でない時間を過ごしている人たちなので、男性も女性も同じような条件なのではないかと思っています。今、課長の分析って正しいと思うし、それこそ消防団を中心にして、地域のコミュニティーががっちり固まっていて、各世代がみんなそこを頼るという仕組みが実はできていて、そこの学習メニューそのものというのは、彼らがそういうふうにして地域のリーダーとして活躍していることで、自分のスキルアップがどんどん図られているんで、やっぱり、頼られることに対する誇りとか、責任感というものも備わってきている。ああゆうの、どんどんさせればいい。

逆に、こっちの方でこういうメニューをセッティングしましたから来てねって言って、定員に満たなくて残念だったねみたいなのは非常にやっている側の満足だけであって、だから、ニーズを直接そうやって推し量るのは非常に難しい。要望あるんですよね、ああゆうサークルとか教室とか開くというのは。こんなのしてほしい、あんなのしてほしいって言って開くんだけど、誰も来ないという仕組みなんで、非常に悩ましいことになるんで。そのやり方はいいと思いますよ。構わないでおいて、どこか集まれる場所を作ってしまって、勝手にさせるというくらいの、行政のやり方としては非常に悩ましいかもしれないけれど、そんなの拘

らずにやっていいと思いますよ。

本図委員：この間、というより中等のチャレンジウォークなんですけれども、３０代から４０代の親ですね、大体の保護者が。年々ボランティアが少なくなって、歩く人がいないくらいになってます。

私が小学校の PTA の役員をやっていた時も、やっぱり、学校に来るのはお母さん方ばっかりで、お父さんたちは全然来ないので、お父さんたちが参加する、たくさん来れるような行事をしようということで、ソフトボール大会をしたんですね。そしたら、いっぱい来てくれました。お父さん方というのは、なかなか自分からは絶対参加しないというようなところなので、お父さん方がとっても好きそうなことを計画するしかないのかな、みたいに感じてました。

高橋市長：地域活動で言うと、力仕事やってくれというと集まるんだよ。何を思ったかはわからないんだけど。側溝の蓋を上げますから男の人たちの力が必要です、というと来てくれるというような仕組みもあるので、こっちの仕掛けとしての作りこみも大切かもしれないけど、やっぱり、そうやって自らが動くような、そういうイメージを醸成してやるのが一番いいのかなと思いますけど。

大滝委員：今、課長さんがおっしゃったのは、３０代から４０代の男性の学びの場を作りたいということなのではないかなと思うんですが。ただ、地域活動に出てきてくれるかなんか、そういうふうな活動に対して集まってほしいということだけではなくて、なんか自分で生涯学習としてですね、自分で目標を立てて、こういうことについて学んでいく、その学びの喜びだとか楽しさだとか、そういうものをこの年代の男性にもぜひ味わっていただくことで、さらに村上市の教育、郷育を中心にした教育にも関わってくるわけですから、そこの掘り起こしではないかなと思うんですよ。

なので、それをどうやって作っていくかということですよね。なかなかその年代の男性とか、自分も経験があるのでわかりますけど、集団で何かを学ぶということは苦手なんですよ。男の人は特に。女の人は割とそういうの集まって、ちょっと先生を呼んで、こういうことについて学習しましょうみたいな、すぐにまとまるんですけど、男はなかなかそれいかないっていうのが、なぜなのか、どうすればそこのところができるのかというところだと思うんですよね。非常に難しいとは思いますが。

佐藤委員：会って話をするということもひとつかなと思っているんですね。そうすると、そこの家庭も見えるし、そこの子供たちのこともわかるし。やっぱり最初は集まっていって、それからいろいろな目的に添って方向付けをしていくということも大事かなと思うのです。

高橋市長：こっちで、お仕着せの形でメニューを出すんじゃなくて、構わないでおいて委ねてしまうという方が長続きもするし、そこのところにちょこっとだけ、そういうのを仕掛けておけばいいわけだ。それはこっち側のテクニックというか、そういうもので誘導するわけで

はないけど、やっぱり集まればそんな意識になる。皆でそれしてみようかなんて、言ってしまった瞬間にやる羽目になる。そこに持って行く、何かをさせる手法としては、いろいろ、今言ったような形のものがあるのかもしれない。ぜひ、そんな仕掛けをいろんなところにしてください。

田嶋課長：また、公民館の協力員とかですね、会議があるので、運営審議会も含めて協力者の皆さんと、こういったテーマに絞って、手法はさっき言ったコーチングと言うようなことをですね。やはりこれからは、何かをこっちで全部お膳立てするのではなくて、ただ集まって何かを話しているところから、何かまちづくりでも何でもいいんですが、発展していけるような、そして皆で交流を深めて行くような、そんなところからスタートなのかなというふうに感じているところです。

高橋市長：ぜひ、よろしくお願いします。

【その他】

「次回の会議日程について」事務局から説明

山田参事：それでは、事務局から、次第にも記載していますが、次回の会議の予定でございます。前回の会議では、11 月に開催することで組んでおりましたが、パブリックコメントを行う時間的なことも踏まえまして、今のところ 12 月 13 日（火）で調整していきたいなと考えております。なお、正式なご案内は、11 月の教育委員会開催時までに日程の方を確定させて、ご案内させていただきたいと考えています。よろしくお願いします。

【閉会】

高橋市長：これを持ちまして、第２回の村上市総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。